

182. 草津市北萱遺跡

出土の縄文土器

1. はじめに

草津市矢橋町および御倉町に所在する北萱遺跡は、草津川改修事業に伴い滋賀県教育委員会と財団法人滋賀県文化財保護協会の手で発掘調査が進められてきた。その調査成果については概要報告書等によって随時報告されているが、平成元年度をもって当該事業に伴う現地調査が完了したのを機会に、数次にわたった調査の発掘箇所的位置関係を整理してみたい。それとともに、これまで調査概要を公表する機会がなかった昭和61年度調査（水資源開発公団依頼分）の成果の一端を紹介するものである。

2. 調査の概要

北萱遺跡の発掘調査は河川工事ポイントNo.2+40m以東は県土木部、以西は水資源開発公団からの依頼によって発掘調査を実施したものである。このうち県土木部依頼部分は昭和57年度に試掘調査を実施し、昭和61年度に至るまで発掘調査が進められた。なお北萱遺

跡に東接する御倉遺跡とは、従来浜街道を境に呼び分けられてきたが、その境界は発掘調査の成果をもとに今後再検討されるべきであろう。

一方、水資源開発公団依頼部分は昭和61年度に試掘調査と仮排水路部分の発掘調査を行い、その後昭和63年度と平成元年度に本格調査を実施した。各調査区の範囲は図2のとおりである。

昭和61年度に実施した試掘調査は、遺跡の西限を確認する目的でT1～T5の5ヶ所のトレンチを設定した。その結果T3では遺構の検出はなく、T.P.=81.8m付近の砂礫層から磨耗の激しい土器が少量出土したのみであった。T1



図-1 調査位置図
(遺跡の範囲は注②文献による。)
(スクリーントーンは図2の範囲)

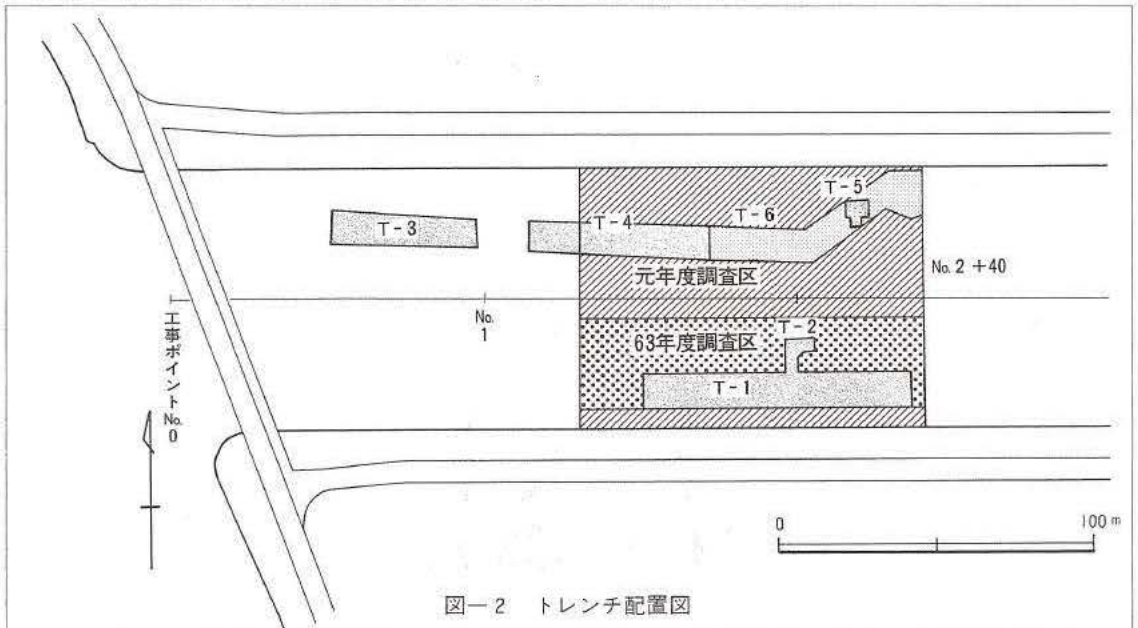


図-2 トレンチ配置図

・T4の西端においても同様の状況であったが、T1ではポイントNo.1+70m、T4ではNo.1+30m以東に多量の遺物を包含する砂礫層を検出した。T1では遺物包含層は不明確ながら上下2層に分けられたが、共に縄文時代～古墳時代の遺物を含んでおり、その内容に大差は認められないようである。

また、これより下層において南北方向に流れる幅約5mの溝を検出したが、遺構埋土からの遺物の出土はなく、この溝の年代は決定しがたい。一方、T4では遺物包含層は1層のみと判断され、縄文時代の遺物が比較的多く出土した。この他、小規模な確認トレンチとしてT2・T5を設定して遺物包含層が広がっていることをチェックした。なお遺物包含層の検出レベルはT5でT.P.=83.2m、T4中央付近で82.5m程度であり、遺物包含層は東から西へゆるやかに下るとともに厚みを減じていく。

同じく昭和61年度に実施した仮排水路部分の発掘調査(T6)では、縄文時代後期から弥生時代後期を中心とする時代の遺物包含層を検出した。古墳時代以降の遺物の出土は少量であった。また遺物包含層より下層に幅約10mの自然流路を検出し、その埋土中から縄文時代前期の土器が少量出土した。以上が昭和61年度調査(水資源開発公団依頼分)の概略である。

3. 出土遺物

北萱遺跡からの出土遺物は多量であり、その全容は今後実施される整理調査の結果を待ちたい。ここでは前節で述べた昭和61年度調査の出土遺物のうち、縄文土器の一部をピックアップして紹介する。なお、遺物

の出土トレンチは1～29がT4、30～32、34がT-1、33がT-2であり、いずれも包含層からの出土である。

出土遺物の中で最古と思われるものは縄文時代早期後半の土器群である。1は胎土に繊維を含み、口縁よりやや下がった位置に突帯が横走する。突帯上と口縁内側には刻みを有する。2・3は繊維を含む胎土に蛇行する突帯を貼付し、突帯を刻んでいる。2の突帯は断面三角形を呈し、棒状工具を用いたらしい深い刻みをもつ。2は入海I式、3は入海II式に比定されよう。4・5は口縁直下にへら状工具による刺突列を数条めぐらせ、4では口縁端部にも刻みがみられる。4・5ともに胎土に若干の繊維を含む。石山式土器に比定できよう。6は磨滅が激しいが、外面に波状の条痕を施しており、天神山式に相当する土器である。器壁は比較的薄く、内面には指頭による凹凸がみられる。胎土には繊維を含まない。7は波状口縁に沿って突帯を貼付した土器である。関東地方で出土する神之木台式土器に類似する。

8～10は押し引き沈線文を有する早期末～前期初頭の未命名型式土器群に含まれる土器である。8は口縁直下に2条の押し引き沈線文を有し、器壁には指頭による凹凸が目立つ。9は口縁下の3条の押し引き沈線文に加えて、これより下方に弧状の押し引き沈線文も数条みられる。内面には条痕調整が観察できる。10では3条の押し引き沈線文が観察でき、器壁内面に凹凸が目立つ。

11～13はいわゆる3字状刺突を施した前期の羽島下層II式土器である。11は口縁部の破片であり、やや内彎する器形を呈する。端面の面取りのために端部の器

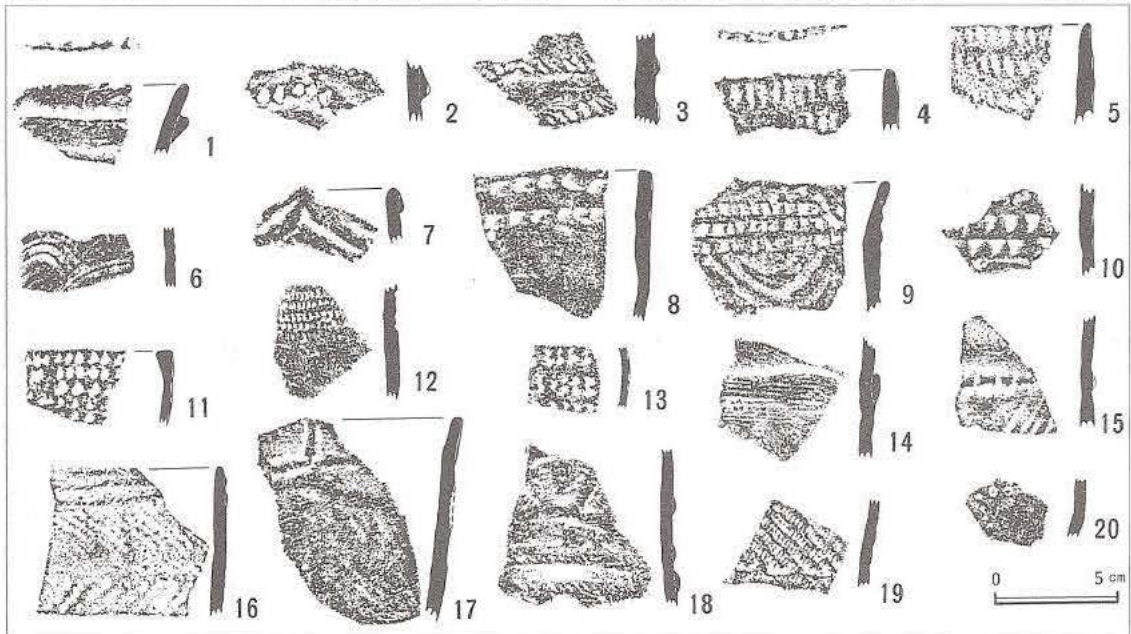


図-3 遺物実測図1

壁がややぶ厚くなっており、内面には条痕調整がみられる。12では内外面ともに条痕調整が観察できる。14・15も条痕調整のみみられる土器であり、早期末あるいは前期前半に属するものと考えられる。14は指頭による凹凸のある器壁に太い突帯を貼付し、その上から条痕調整を行っている。15は薄めの器壁に突帯を貼付し、その上を二枚貝の先端で刺突している。これより下方の体部に条痕調整がみられる。

16は羽状縄文地に、口縁下に2条の低い突帯を貼付し、突帯上は軽く刻んでいる。北白川下層Ⅱc式土器である。17は波状口縁を呈する土器である。横走る突帯の他に波頂部から突帯を垂下させている。磨滅が激しいが体部には縄文の施文がみられる。18はやや幅広の突帯を縦横に施し、突帯上を刻んでいる。19は単節斜縄文を施した土器である。20は小円形の刺突を2ヶ所に施文した小片である。これらの土器は型式名を明らかにしがたいが、縄文前期に属するものであろう。

筆者のこれまでの知見による限り、北萱遺跡出土の縄文土器のうち、中期に属するものは発見できなかった。21以下は後～晩期の土器である。

21～23は後期前半の磨消縄文土器である。21は波状口縁を成し、口縁端部は尖り気味におわっている。これに対して22では端部に軽く面取りを行っている。24・25はこれより時代の下る後期後半の元住吉山Ⅰ式に属する土器である。共に3条の沈線を横走させ、口縁端に接した部分と2条めと3条めの沈線間を縄文で埋めている。これより下部で屈曲する器形を示し、口縁端部は面取りを行っている。横走る沈線は21～23に比べて細く、21～23では棒状工具を用いたのに対して、24・25はへら状工具で施文したものであろう。

26は器壁の磨滅が激しいが、八字状に突帯を施し、これに沿って刺突列を巡らしている。刺突の原体は不明である。北白川上層式あたりに比定できる土器であろう。27・28は幅広の凹線を数条横走させた土器であり、27は外反する器形を有する口縁部破片である。共に後期末の宮滝式土器に比定できる。

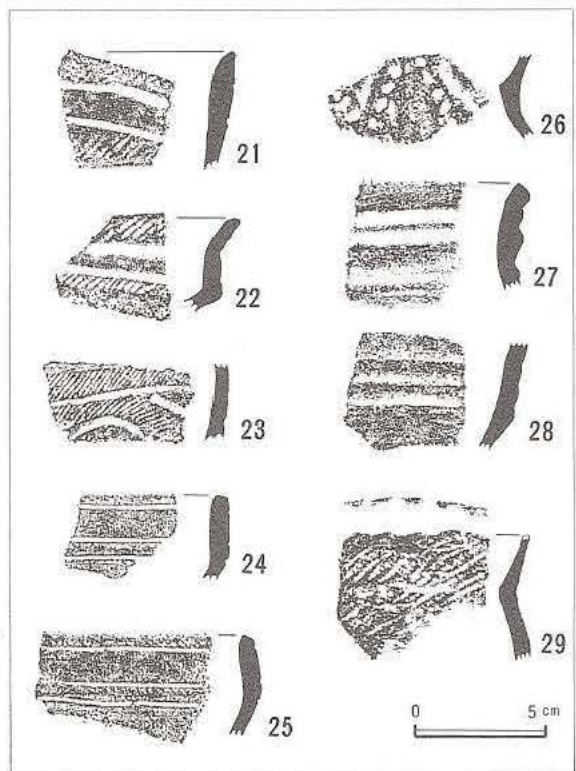
29は頸部で屈曲する器形で、端部は指または棒状工具を用いて鈍く刻んでいる。外面全体に縄文の施文がみられる東日本系の土器である。北陸地方の中屋式土器などに類似した器形がみられるので、晩期中葉頃の土器と考えられる。

30～34は口径の復元可能な土器であり、該期の土器は出土点数も比較的多い。30は小形の鉢形土器であり、端部は丸みをもっておわる。外面は板状工具で削り上げ、内面は条痕調整を施している。内面には炭化物の付着もみられる。時期を限定しにくいだが、晩期中葉の土器としておく。31は器高36cm以上に復元できた深鉢形土器である。口縁端部にしっかりと面を、ナデ

てつくっている。外面には二枚貝条痕を、上半では横方向、下半では縦方向に施す。内面は口縁部付近をナデる以外には、顕著な調整痕はみられない。晩期中葉(滋賀里Ⅲ式)の土器である。色調は灰色を呈し、体部外面に炭化物が付着している。

32～34は晩期後半の突帯文土器である。32・33は口径も類似し、共に突帯上をへらでD字に刻んでいる。32は内面に条痕調整とへらミガキが観察できるのに対し、33は胴部内面に二枚貝条痕、外面に削り痕がみられる。34は突帯が口縁に接して貼付され、刻みは小D字である。外面のへらミガキは粗く、内面に粘土紐の接合痕を残している。この土器は色調は暗褐色を呈し、淡褐色の32・33とは異なっている。胎土に角閃石を含むことから、南河内地域からの搬入品と考えたい。長原式土器に比定できる。32・33は突帯の形態から、これに先行する船橋式に類似するものと判断できるが、県内の該期の土器について畿内との異同を論じた研究は乏しく、明言は避けたい。

以上のように北萱遺跡出土の縄文土器は早期から晩期にまで及ぶが、管見によれば晩期中葉以降が遺跡の盛期と言える。前期の土器の出土がこれに次いでいる。これは上流の県土木部依頼分の調査区の結果と、現在公表されている資料による限りでは近いといえる。なお本節における土器型式の比定にあたっては、『縄文



図一4 遺物実測図2

土器大観』(1988～1989、講談社)、などを参考とした。

4. おわりに

本稿で紹介した遺物は、遺跡の概略を示すためにピックアップしたものであるが、整理の進んでいない現状では正しい全体像をどれだけ示すものであるか不安である。昭和63年度・平成元年度の調査概要(注①-c・d)では縄文晩期以降の遺物が多量に出土したことが記されているが、北萱遺跡にはこれに先行する時期の遺物も少なからず存在することを示すことが本稿の目的の一つであるので、ご容赦願いたい。

北萱遺跡においては、これまで珠状耳飾・土器片錘といった県内では類例の少ない遺物が出土している(注①-b)が、現在公表されている資料を見る限りではこれらの遺物の時期を限定しがたい。また当遺跡の西方には、北萱遺跡と同じく縄文時代早期後半以降、各時期の縄文土器を出土した矢橋湖底遺跡があり、当遺跡との関わりが注目される。今後の整理調査によって、これらの問題を解決できれば幸いである。

(井上 洋介)

注

- ① a) 『草津川改修事業に伴う埋蔵文化財発掘調査概報 一御倉・北萱地区一』(1986. 3)
 b) 『同 概報 2 一御倉・北萱地区一』(1987. 3)
 c) 『文化財調査出土遺物仮収納保管業務 昭和63年度発掘調査概要』(1989. 3)
 d) 『同 平成元年度発掘調査概要』(1990. 3) いずれも滋賀県教育委員会・湖滋賀県文化財保護協会発行
- ② 『昭和60年度 滋賀県遺跡地図』(滋賀県教育委員会 1986. 3)
- ③ 『湖南中部流域下水道矢橋処理場中間水路浚渫工事予定地内 矢橋湖底遺跡試掘調査報告書Ⅱ』(滋賀県教育委員会・湖滋賀県文化財保護協会 1982. 3)

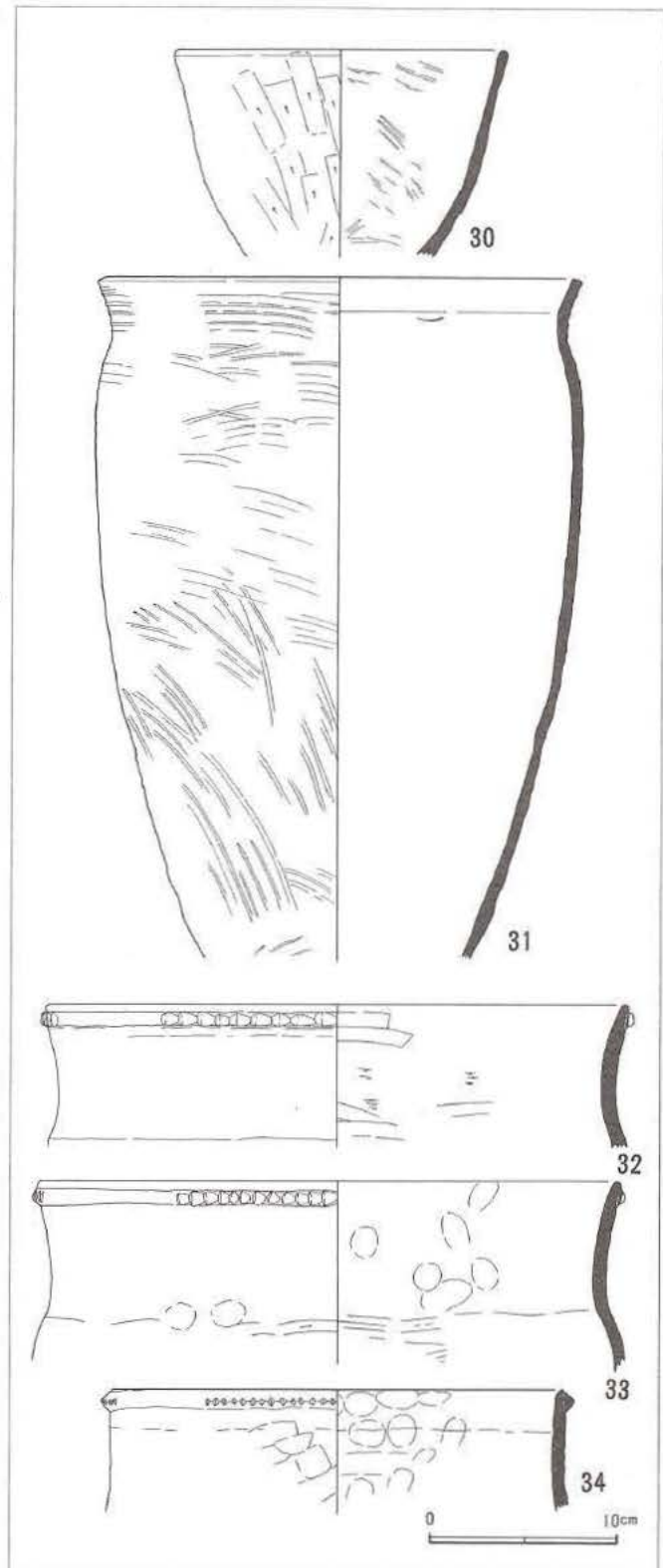


図-5 遺物実測図 3